

## 目的語と情意表現についての試論

景山 弘幸

### 0. はじめに

下の(1)から(4)の文には共通点がある。それは不定冠詞つき名詞句(太字で表記)が表面上目的語になっていることである。本稿では(1)にみられる *owe* を含む文中の不定冠詞つき名詞句が言語主体つまり話者の「情意」を表す副詞的な要素とみなし、「情意」の色濃い表現を「情意表現」と呼ぶことにした場合、同様に不定冠詞つき名詞句が目的語になっているいくつかの構文、具体的には(2)のような「二重目的語構文」、(3)の「同族目的語構文」そして(4)の「軽動詞構文」についても程度の差はあれ「情意表現」とみなせる可能性を指摘し、これらの構文の動機付けを探ってみたい。

- (1) a. I owe you **a lot**. GENIUS  
 b. I owe you **a debt of gratitude** for your assistances. RH
- (2) a. Hit me **a homerun**.  
 b. Slay me **a dragon**. Green (1974)
- (3) a. Caruso sang **a song**.  
 b. Shirley danced **a dance**. Rice (1988)
- (4) a. John had **a kick** of the ball.  
 b. John had **a lick** of the ice-cream. Wierzbicka (1988)

以下、1節では動詞 *owe* を含む二重目的語構文を例にとり、二重目

的語と呼ばれる二つの名詞句間の関係を観察する。なお本稿では動詞に直接後続する名詞句を第1名詞句、またそれにさらに後続する名詞句を第2名詞句と呼ぶことにする。2節ではある種の二重目的語構文は「情意表現」とみなせることを述べる。3節で、二重目的語構文が情意表現となる要因を「他動性の型」という観点から述べる。4節では、二重目的語構文中の第2名詞句はメトニミーが関わっている点で「結果の目的語」と性質が類似していること、またやはり不定冠詞つき名詞句が目的語になっている「同族目的語構文」、「軽動詞構文」が「情意表現」とみなせる可能性があることを指摘する。5節では、「情意表現」とゲルマン起源の動詞そして「他動性」の低い目的語との関係を考える。

議論に入る前に「情意」について確認しておく。「情意」とは葛西(1998:8)やメイナード(2000:79ff)でいわれる人間の精神活動である「知・情・意」の中の「情意」である。「知」にとってはもっぱら「情報」ということが重要で、「情意」にとっては「話し手の意図・気持ちの持ち方」が重要になる。「情報」と「情意」は二律背反の関係にあるのではなく、もっぱら「情報」伝達に主眼のある表現から、「情報」に加えいくらか「情意」を伝えようとする表現が連続的に存在し、中にはほとんど「情意」だけの表現もあると考えられる。例えば「過去形の報告文」(past report)はもっぱら「情報」の伝達に主眼のある表現であり、Oh!などの「間投詞のみの表現」は「情報」的貢献はほとんど無くもっぱら「情意」そのものの表現であろう。また情意の色濃い表現という意味での「情意表現」を葛西(1998:180ff)でいわれる「今」的、「ここ」的という「自己中心的」(ego-centric)な「私的言語」という視点から見つめ、また池上(2000:265-6)で述べられている日本語談話の「自己中心的」な「話し手にとって復元可能」である「独白的」(monologue)性質が、対極的とされる英語の中、しかも典型的にゲルマン起源の語を用いた「他動性」(transitivity)の低い表現の中に見出すことができることを示す。

ここにあげられた論文は、英語のさまざまな現象を、「何を言おうとしているのか」、話し手は「どんな気持ちで話しているのか」という話し手の「意図」と「気持ちの持ち方」、つまり「知」よりは「意」と「情」という、ことさら主観的な面に注目して、みなおして見ようという試みである。

葛西 (1998: 序章、下線は筆者)

symbol としての言語記号はすべて indexical な要素を含むのであるが、情意として具現化する側面は情報に比べて、場に依存する度合いが高い。情意はどうしても、場の三要素である、主体、事物、相手と、直接関係づけて解釈されることが多いからである。

メイナード (2000:91、下線は筆者)

強い感情に支配されたときには、思考が弱まり（客観的な態度が失われ）自己中心性の強い「私的言語」の性格をおびる。

葛西 (1998:181、下線は筆者)

〈聞き手にとって復元可能〉という原則に立っての談話が典型的に〈対話／ダイアログ〉的 (dialogue) と言えるものであるとすると、〈話し手にとって復元可能〉という原則に立っての振る舞いを多く許容する日本語の談話は、〈独白／モノローグ〉的 (monologue) な性格を多く帯びていると言えるであろう。相手への働きかけという側面がしばしば如何にも稀薄と見えるのである。バルト (R.Barthes) が異なるコンテクストで用いている表現を借用するなら、〈自動詞的〉 (intransitive)—つまり、働きかける相手の姿が明確に見えない—と言ってもよいであろう (Barthes1971)。

池上 (2000:266、下線は筆者)

## 1. 二重目的語構文としての owe 文について

本節では二重目的語構文としての owe を含む文中の第 1 名詞句と第 2 名詞句の解釈には「所有関係」あるいは「因果関係」の喚起というメトニミーが関与していることを述べる。

(5) a. I owe my brother \$50.

b. I owe you nothing.

(5)に見られるように動詞 owe は二重目的語構文として用いられる場合がある。2つの目的語のうち、第 2 名詞句が「返すべき借り」で第 1 名詞句が「返す先」である。つまり give に代表される授与動詞と同様、第 1 名詞句と第 2 名詞句との間で「所有関係」が読み取られる。ところが同じ owe を含む文であっても(6)の文は容認可能性に揺れが見られる。一方、(7)のように前置詞 to を含む与格構文は完全に容認可能とされる。

(6) a. (\*) I owe you my success.

b. (\*) I owe you what I am.

(7) a. I owe my success to you.

b. I owe what I am to you.

(6)の文は一般に辞書では非文とされるが、実際にインフォーマントチェックをしてみると実は容認可能性に揺れが見られ、容認される場合がある。景山(2001)では(6)の文の容認可能性の揺れは動詞直後の第 1 名詞句とそれに後続する第 2 名詞句という並置された 2 つの名詞句に対してそれぞれ行使されるメトニミカルな解釈の難易度によると考えた。結論だけ示せば(6)の文が容認される際の解釈は次のように考

えられる。

		〈所有者〉	〈所有物〉	: 所有関係
I	owe	you	<b>FAVOR1</b>	
			<b>FAVOR2</b>	— my success
			〈原因〉	〈結果〉 : 因果関係

FAVOR (1 = 2) が活性化され「図・地反転」状態

景山 (2001 : 108を改変)

解釈者は you を参照点とする「所有関係」をメトニミカルに喚起する<sup>1)</sup>。ところが「所有関係」を心に描いたとしてもすぐに you を「返す先」つまり「所有者」とし my success を「返すべき借り」つまり you の「所有物」と解釈することはできない。my success は you の所有物あるいは所有されるべきものではないからである<sup>2)</sup>。では、どのように解釈されるのか。三つのプロセスが必要である。まず、参照点のみを言語化する通例のメトニミーの働きによって you を参照点として「返すべき借りとしての好意」、FAVOR1 (例えば、お礼) が「活性化」される。You が FAVOR1 を受ける (所有する)「所有構造」が喚起される。第二に、言語化されている my success を参照点としてこれまたメトニミーに基づいて my success という「結果」をもたらしてくれた「原因」、つまり「因果関係」を主体的に読み込んだ場合に、「my success の原因」である FAVOR2 (例えば、励まし) が「活性化」する。最後に FAVOR1 と FAVOR2 が「報恩」(reciprocation) にふさわしいとして同一視 (あなたの励ましによる成功、そしてそれに見合うお礼) された FAVOR1 = FAVOR2 という関係が「活性化」され、言語化された要素 (my success) と潜在的要素 (FAVOR1 = FAVOR2) がいわば「図地反転」した場合にはじめて容認可能となると考えられる。FAVOR が完全に前景化し言語化され逆に my success がすっかり後景化して言語化されないと(8)となり、この文は辞書にもある全く容認可能な文となる。

## (8) I owe you a favour.

(7)のように前置詞 to の明示によって「帰する先」が分析的で明快でないわばデジタル式の与格構文に対して、二重目的語構文は総合的でアナログ式であり言語主体の主観的なメトニミーによる解釈が必要とされる。そのメトニミー解釈がすんなりいかない(6)のような文は容認不可能と判断される場合が多い。しかし同時にこの言語主体の主観的なメトニミーに基づく解釈こそが難渋ながらも(6)のような文を解釈してしまい、結果として容認可能性の揺れをもたらすものと考えられる。(6b)の I owe you what I am. は(6a)よりもさらに容認可能性が低く判断されがちである。my success の場合よりもさらに「因果関係」を読み込みにくいのがその原因と考えられる。「成功の原因」はまだしも「今ある私の原因」となると解釈の難度はかなり高い。

以上、二重目的語構文としての owe を含む文中の第1名詞句と第2名詞句の解釈には「所有関係」あるいは「因果関係」の喚起というメトニミーが関与していることを述べた。

## 2. 「情意表現」としての二重目的語構文

### 2.1 「感謝」表現としての owe 文

## (10) I owe you a lot. GENIUS : 1281

(10)の文には解釈が2つあるとされる。一つは「私はあなたにたくさんの借金がある。」という意味、もう一つは「大変感謝いたします。どうもありがとう。」である。前者の解釈では a lot は a lot of DEBT (借り) であり、後者の解釈では Thanks a lot の a lot と同様、感謝の程度を表わす副詞の働きをしていると考えられる。山梨 (1986:21) での「発話行為」の観点から見ると、「一人称の主語」、「2人称の間接目的語」をとった場合、owe は下記の「話し手による事態、状況 P に

対する心的態度の表明」をする「態度表明型」の遂行動詞に含まれうると考えられる。

「態度表明型」遂行動詞：「話し手による事態、状況 P に対する心的態度の表明」

apologize, bless, commiserate, complement, condole,  
congratulate, deplore, felicitate, thank, welcome, etc.

山梨 (1986:21)

さて、(10)の文は「感謝」という「心的態度」つまり「情意」が色濃い表現である。「情意」を効果的に伝える働きをしているのは、情意の程度を表す副詞的な第2名詞句の a lot と、しばしば「間接目的語」と呼ばれる第1名詞句の you といえる。これら二つの名詞句の言語化で表面上二重目的語構文が成立する。

「感謝」を表わす代表的な動詞 thank も you をとる。owe も thank ももともとは与格 (dative) つまり「人や物に向かって動作がなされる際に授与・利害・影響などの働きを受ける間接目的語 (『現代英文法辞典』: 368)」をとった動詞である。発話状況の要素と言う点からみると、「聞き手」が言語化されてことになる。

ここで「量の類像性」(The quantity principle) を導入する。

The quantity principle:

- (a) "A larger chunk of information will be given a larger chunk of code".
- (b) "Less predictable information will be given more coding material".
- (c) "More important information will be given more coding material".

Givón (1990 : 969)

(1) a. Thank you.

- b. Thank you for your assistances.
- c. Thank you very much for your assistances.

(11)では言語化される要素が増えるに従って「感謝」という「情意」が強く醸しだされる。「量の類像性」が(11a)から(11c)にいくにしたがって、「丁重さ」の度合いが大きくなることを説明する。言語化される要素が多いということは聞き手にとっては「情報量が多い」か「予測がつかない」か「重要」かである。情意表現にとって「重要」ということを「情意が強い」と読み替えてみれば、「情意表現においては情意が強ければ言語化される要素は増える」ということになる<sup>31</sup>。

以上、情意を効果的に表現しようとする場合に言語化される要素が増えること、またその要素はしばしば目的語（間接目的語、直接目的語と呼ばれる）として登場し、その結果、表面上二重目的語構文が成立することをみた。

## 2.2 「願望」表現としての二重目的語構文

例えば(12)で、単に Hit! 「打て」で済まされず、Hit me! 「打ってくれ」でも足りず、Hit me a homerun. 「一発でかいの打ってくれ」とまで表現される理由は、前節で述べた「情意の強さが言語化される要素数を増す」ということでのいいのであるが、2.1節での owe 文と同様、二重目的語構文と呼ばれてしまう表明上の形式をとる。

- (12) a. Hit!
- b. Hit me!
- c. Hit me a homerun.

(12c)および(13)のような構文において、動詞に直接後続する第1名詞句が典型的には話者（me あるいは us）であり、(12c)のような構文は第1名詞句 me と第2名詞句 a homerun との間に「所有構造」が喚起されることで「受益が匂い」、話者の願望が効果的に表現されることに



については景山（1999a）で述べた。

(13) a. Crush me a mountain.

b. Slay me a dragon.

c. Cry me a river.

Green (1974)

さて、(14)のような表面上二重目的語構文になっている文はすべて「所有構造」が喚起されるのだが、「所有」の現実性については差がある<sup>4)</sup>。

(14) a. John sent **Mary** a book.

間接目的語（受け手）

Mary a book

b. John bake **Mary** a cake.

利害の与格（受益者）

Mary a cake

c. Hit **me** a homerun.

心性で格（もっばら話し手）

me a homerun

(14a)の授与動詞 send のいわゆる「間接目的語」Mary は「受領者」と解され、Mary が a book を所有するのは「確実視」されている。しかし (14b)の創造動詞 bake の場合の Mary は「利害の与格」とも呼ばれる「受益者」であり、Mary が a cake を所有することが「意図」されてはいるが確実ではない。(14c)になると、「心性で格」とも呼ばれる me は所有が「匂う」だけである<sup>5)</sup>。(14a)から (14c)にいくにしたがって所有構造は言語主体の主観的解釈に強く依存している。

### 2.3 程度を表す副詞的な第2名詞句

ここでは第2名詞句について考察する。

- (15=(13)) a. Crush me a mountain.  
 b. Slay me a dragon.  
 c. Cry me a river.

「情意」の強さが「自己中心的」で「話し手にとって復元可能」な要素、(15a)なら a mountain が言語化されている。(15b)の a dragon、(15c)の a river も現実存在し動詞による「他動性」が及ぶ目的語ではない。いずれも「自己中心的」で「話し手にとって復元可能」な要素であり、いずれも願望（情意）の強さを表す「程度の副詞」とみなすことができる。「(山でもつぶすような勢いで) ぶつぶせ」、「(竜でも殺さんばかりに) やっちゃえ」、「(涙の河ができるほど) 泣いておくれ」という意味であろう<sup>6)</sup>。

再び owe 文に目を向ける。(16)の例は、みかけ上は二重目的語構文となっているが、第2名詞句はやはり副詞的に「情意」の程度を表わしているようである。「返すべき借り」としての情的中身の問題は影が薄く感じられる。

- |  |         |
|--|---------|
| (16) a. "I owe my parents <b>a lot</b> ," he admitted.   | LDCE    |
| b. I owe my teachers <b>a great deal</b> .   | OALD    |
| c. Maybe I do owe you <b>something</b> after all.  | BNC     |
| d. Tina I pay for myself and he pays for himself. That way you don't owe him <b>anything</b> . | COBUILD |
| e. You owe me <b>nothing</b> .   | BNC     |

もう少し第2の名詞に注意してみる。(16)に加え(17)の例からおおよそ第2名詞句に定表現がきていないことに気がつく。

- (17) a. I owe my brother \$50.  
 b. I'll write and tell Marie; I owe her **a letter** anyway.  
 c. One of the neighbours owes me **a favor**, I'm sure they'll

- take care of the cat.
- d. Thanks a lot for being so understanding about all this - I owe you **one!**
- e. “I owe you **an apology**, Margaret,” he said sheepishly.
- f. I knew that I owed Shanklin **my life**.
- g. …think that the world owes you **a living** LDCE

(17a)の\$50は借りた\$50そのものではなく、価値が見合う不定の\$50である。(17f)のmy lifeは興味深いのだが、ここでは「感謝」の程度を特に強く表現した副詞的表現としておく。(18)は定表現の例である。

- (18) a. Researching the article on the cost of running a one-day event highlighted **the debt** we owe organizers.
- b. He was right, of course; she did owe him **the courtesy** of an apology, even though he would very likely throw it back in her face. BNC

(18a)は関係節を伴って唯一的に同定される debt の例、(18b)は of 前置詞句によって限定が加えられた第2名詞句の例であるが、共に過去形の報告文である。発話行為の観点から、情意が濃い典型的な文は「一人称主語」、「二人称間接目的語」、「現在時制」とすれば(18)は情意が非常に薄い部類に分類できる。

以上2節では、「情意表現」とみなせる二重目的語構文においては、第1名詞句が感受者である〈人〉として言語化され、第2名詞句が情意の程度を表す不定（典型的には不定冠詞つき名詞句）表現として言語化されることを見た。

### 3. Human Interaction という他動性の型

(19)の第1名詞句は間接目的語とも呼ばれる〈人〉である。〈人〉は「感受者」(sentient)である。

- (19=(17)) a. I owe **my brother** \$50.  
 b. I'll write and tell Marie; I owe **her** a letter anyway.  
 c. One of the neighbours owes **me** a favor, I'm sure  
 they'll take care of the cat. LDCE

ここで「2つの他動性の原型」(Tuggy 1997)を導入する。

- A. Manipulation: an animate, typically human, entity manipulates or affects an inanimate entity. The animate entity is picked as Trajector (i.e. it is given the highest degree of cognitive prominence among the participant entities), and the affected inanimate entity is the Landmark. (e.g. make, paint, slice etc.)
- B. Human Interaction: the interaction of animate, again particularly human, entities. (e.g. idolize, knight, hire etc.)  
 ... the more active or initiative human (or, for symmetrical interactions, the more communicatively prominent one) is taken as Trajector, and the other as Landmark.

Tuggy (1997:38-39)

Manipulation 型とは典型的に「〈人〉主語が〈物〉目的語に影響をおよぼす」という言語表現であり、一方 Human Interaction 型とは「〈人〉主語が〈人〉目的語と関わりあう」という言語表現である。Tuggy は Nawalt 語の「やりもらい動詞」の分析でこの考えを導入し、Taylor (1997: 90) も Zulu 語の二重目的語構文の分析においてこの他動性の原型を認め、「やりもらい (give-event)」をロマンス語が Manipulation 型のみで表わし、Zulu 語が Human Interaction 型を好み、英語は両方の型をとることを指摘している。

英語の give に代表される「やりもらい動詞」が面白いのはこの二つの原型を両方とれることである。Manipulation 型をとった場合には、

〈物〉が第1名詞句として動詞に直接後続し「その過程の中で影響された人 (affected entity)」は前置詞句として現われる。また Human Interaction 型となる場合というのは「その過程の中で影響された人」が間接目的語として言語化されるということである。後者の場合が二重目的語構文と呼ばれる。

- A. X give **Y** 〈物〉 to Z 〈場所化した人〉 (X manipulates Y)  
       give **it** to you
- B. X give **Z** 〈人〉 Y 〈物〉 (X interacts with Z by giving him Y)  
       slice **me** a couple of carrots

この2つの他動性の原型という視点は「情意」の濃い英語の二重目的語構文を作り出す一つの動機付けを示唆する。それは「物を操作あるいはコントロールする」というよりは「人と関わり自分も相互に影響される」というおそらく人間にとって原初的な構図が、ゲルマン起源のしかも身体性に深く関係する give の文ににじみ出るのではないかというものである。つまり英語は、池上 (1981) で論じられているように〈する〉的な性質の強い言語、あるいは下で示されるように「他動詞構文」を基本とする言語とされるが、「情意」が絡む状況では native の語が選ばれ、「主体と客体が互いに融合しあい、どちらかという自動詞的な表現」となると推測される。

池上 (2001:162)

以下が「情意表現」としての二重目的語構文についての本稿での推測である。

推測 1 : 「情意」が色濃い状況では英語でも主体と客体が互い

## Sensation Schema

GOAL &lt;……SOURCE

(human)

↓

Sentient

## Action Schema

SOURCE ……&gt;GOAL

(human)

↓

Agent

body-internal, physiological, private

self-directed, intransitive, passive

process-oriented, unbounded

non-volitive, uncontrollable

spontaneous:e.g.,*can see = see*

stative

subject-object merger

body-external, physical public

other-directed, transitive, active

goal-oriented, bounded

volitive, controllable

intentional:e.g.,*can strike =strike*

dynamic

subject-object contrast

に融合しあい、目的語はあっても他動性の低いものとなりどちらかという自動詞的な表現となる。また「量の類像性」により強い「情意」は「情報」的には内容の乏しい要素の言語化をもたらし、時として二重目的語構文を呈す。

池上 (2000:295) は「体験的な臨場感覚への拘り」について次のように述べている。

ある状況を見たり、あるいはそれについて語るという場合、見たり語ったりする主体は自分の見たり語ったりする状況の外に自らを措定し、そこから言わば状況を観察する第三者としてその状況を読みとるといった形の演出をとることもできるし、一方また、その状況の内に自らを措定し、状況に臨場する当事者としてその状況を読み取るという形での演出をすることができる。私たちが何かを見るとき、何かについて語るといった営みについて、現在、ごく普通に抱いている構図というものは、間違いなく前者のタイプであろう。そのような構図として受けと

る傾向は、観察の対象を観察者とは厳密に対峙させるべしという古典的な科学思想の要請にも影響されているのかも知れない。しかし、私たちが何かを見たり、何かについて語ったりするという営みのもっとも本来の、〈元型〉的な姿といえ、疑いもなく、後者のタイプ、つまり私たち自身が当事者として臨場し、直接〈いま〉、〈ここ〉で身をもって体験しているという構図のものであろう。そして多分、そのような身体を介しての直接性ということが、この後者のタイプの見てとり方、読みとり方を私たちにあって、より印象深いものと感じさせるのであろう。日本語の話し手は元型的な体験の構図への拘わりを（西歐的な言語の話し手と較べて）かなり多く保持しているように思える。

池上（2000：295）

引用の最後の「元型的な体験の構図への拘わり」という観点こそが、2節でみた英語のある種の二重目的語構文、また4節でみる同族目的語構文さらには軽動詞構文の性質を見極めるのに重要かつ有効と考える。

#### 4. メトニミーに基づく目的語

##### 4.1 結果の目的語

前節でみた情意表現中の第2名詞句は言語主体の主観的な解釈、具体的にはメトニミーが関わるという点で(20)の「結果の目的語」と性質が似ている。

(20) a. dig **a hole**, bake **a cake**

b. 地面を掘る／土を掘る／穴を掘る 山梨（2000:72）

「地面を掘る」、「土を掘る」、「穴を掘る」の三つの表現は、厳

密には、すべて同等に適切なわけではない。(中略) 一般に、行為の対象としての〈地面〉、行為により直接的にかかかわる〈土〉にくらべ、行為の結果としての〈穴〉のほうが、行為との共起性の観点からみて飛躍的な解釈を強いられる。この点が、結果のメトニミーがかかわる「穴を掘る」の適切性の判断が下がる一因だと考えられる。 山梨 (2000:107)

dig the hole であれば、「すでにある穴を掘る」という解釈も成り立ち、他動詞 dig の目的語としては他動性の高い表現となる。裏を返せば、結果の目的語の他動性は低いと言える。

#### 4.2 同族目的語

同族目的語にも不定冠詞つき名詞があらわれる。もちろん(21)で言えば、(21c)のような定冠詞つき名詞句、(21d)のような限定詞つき名詞句といった定表現も可能であるが、その「他動性」(transitivity)が違う。

- (21) a. \*Susan lived a life.  
 b. Susan lived a good life.  
 c. Susan lived the life that she wanted.  
 d. Susan lives her life well.

Rice (1988) は他動性の観点から同族目的語の「タイプ」としての解釈を観察している。

- (22) a. Caruso sang a song.  
 b. Caruso sang the song.  
 c. Caruso sang many beautiful songs.

- (23) a. Shirley danced a dance.  
 b. Shirley danced the dance.



## c. Shirley danced many wild dances.

Riceによれば(21a)の a life がだめで(22a)の a song、(23a)の a dance が容認されるのは a life が生きる行為から独立させられない、つまり他動性が極めて低いのに対し、a song と a dance は歌う、踊る行為から独立したタイプ (type) としての解釈、いわば日本語連用形の「踊り」、「歌い」という解釈が可能なので幾分他動性が上がり文全体の容認度が高まると言える。ただし Life の場合も(21b)の a good life になるとタイプとしての解釈が可能であり他動性も上がり容認される。さらに(21c)、(22b)、(23b)のように定冠詞がつきタイプというより一回のトークン (token) となるとさらに他動性は高くなる。(22c)や(23c)のように複数形になった名詞もタイプとしての解釈となる。タイプとしての解釈は「歌う歌う」、「踊る踊る」とでも考えればよい。この点でも「生命」を反復するのは困難である<sup>7)</sup>。

Rice の同族目的語構文に関する指摘は極めて示唆的である。

Not surprisingly, due to the extensive and multi-source vocabulary of the language, English tolerates a comparatively large inventory of cognate object phrases. Nevertheless, these constructions are confined to the expected domains of, body function, performance and discharge and they usually tend towards the basic Old English or Germanic vocabulary (e.g. “to give a gift” vs. “\*to donate a donation”)

Rice (1988:208、下線は筆者)

引用中下線を施した部分は3節で引用した池上の「元型的な体験の構図への拘わり」と深く関係していると考えられる。また同族目的語構文に使われるゲルマン起源の語彙 (Germanic vocabulary) は二重目的語構文をとる動詞分類の際にいわれる「ラテン語起源の制限 (the Latinate restriction)」(Levin1993:48) と無関係とは思えない。

### 4.3 軽動詞構文

軽動詞構文にもゲルマン起源の語が使われる。Give や have や take である。Dixon (1991) はこの構文が「親密さを醸し出し、フォーマルというよりは口語でよく使われる」と指摘している。

These constructions tend to carry an overtone of friendliness and intimacy, and are found more frequently in colloquial than in formal styles of English.

Dixon (1991:337、下線は筆者)

本稿での考察からすると軽動詞構文が「情意表現」の要素を含むことが予想される。

- (24) a. John had a kick of the ball.  
b. John had a lick of the ice-cream.

Wierzbicka (1988) は(24)に関し次のように述べている。

Here *have* works as a detransitivizer: the object is de-emphasized, the predication concerning the object is backgrounded, and at the same time the emphasis on agent increases.

Wierzbicka (1988:346、下線は筆者)

典型的な他動詞構文の kick the ball や lick the ice-cream と have を用いた軽動詞構文 have a kick, have a lick の違いは the ball, the ice-cream に対する他動性の違いであるというのである。軽動詞 (light verb) のうち少なくとも have に関しては、他動性を下げる (detransitivize) 働きが指摘されている。つまり軽動詞構文が自動詞的ということである。Take a walk や give a kiss も自動詞的である。

もう一つ軽動詞構文の目的語には特徴がある。それは動詞と同じ形

の名詞、いわば裸の動詞に不定冠詞がついた形になっていることである。Have a swim の swim は日本語で言えば動詞の連用形を名詞としてつかう「泳ぎ」という裸の形である。Jespersen (1974) は次のように述べている。

In not a few instances, sbs[substantives] formed from vbs[verbs] without change of form compete with sbs formed by means of derivative endings, especially Latin formatives. There is often a difference in sense, the role of the shorter word being generally to denote a single occurrence.

Jespersen (MEG6:119、下線は筆者)

A swim が「ひと泳ぎ」になるわけである。この a swim は一回の行為を示しはするが、依然タイプと解釈できる<sup>8)</sup>。日本語で言えば「平泳ぎなど特定の泳ぎ」をしたというよりは「一泳ぎ」したわけである。つまり軽動詞構文における不定冠詞つき名詞句の他動性は低い。この点からすると(25)のような give 文も軽動詞構文といえ、その際の give の意味は「何かを与える」というよりは意味が漂白し do (「する」) に近い「やる」の意味合いとなることが予想される。

(25) She gave me a kick

日本語でも「野球をやる」が「野球をする」に比べて「口語的な感じがする」と池上 (1991:299) は指摘している。「口語的な感じ」は「親密さ」が醸し出されることにつながるだろうから、同様の機微が(25)の文にあるとしたら紛れもなく「情意表現」ということになる。不定冠詞つき名詞について言えば、「a cat は発話時の談話空間の中で心的接触はしているが唯ひとつに同定していない。」とされる (高橋 2001:115)。タイプである不定冠詞つき名詞は唯一的に同定される定冠詞つき名詞に比べて「情報」的な重要度は低いと考えられる。しか

しその反面、定表現よりも「情意」を伝える効果は高いのかもしれない。

(26) a. May I ask you a question?

b. May I ask you the question?

(26b)の the question の情動的な重みと(26a)の a question の情動的な軽さ、そして情意を読み取ることはさほどの外れではないだろう。

## 5. 情意表現とゲルマン起源の動詞そして他動性の低い目的語

私は次のように推測する。

推測 2 : 二重目的語構文も同族目的語構文も軽動詞構文もその存在理由の一つとして「情意」の喚起があるのではないか。「情意」は使用されるゲルマン起源のしかも人間の基本的な経験をあらわす動詞によってメトニミーに基づき文化的なフレーム (frame) が喚起されるのではないか。「情意」を共に感じるには共同体内での原初的 (primitive) でかつ自前 (native) の言葉が必要であり、言語表現が「情報」あるいは論理的な「知」の観点からすると逸脱し「自己中心的」で「私的言語」の性質を帯び「話し手にとって復元可能」な「独白的 (monologue)」なものになってもまだ存在価値はあるのであろう。

本稿での「情意表現」としての二重目的語構文という議論が正しいとすると(27)のような二重目的語構文と与格構文の交替現象についても多少違った見方ができるかもしれない。

(27) a. Mary gave him the argument.

b.?\*Mary gave the argument to him.

(28) a. Mary gave me the flu.

b.? She gave the flu to me. Kitamura (1999:84)

(27b)のように第2名詞句が定冠詞つき抽象名詞の場合には「同定可能な物の物理的な移動」を明示的に表す与格構文になじまない。「議論をふっかけた」という事態においては、議論の情動的価値よりもむしろ「(議論を) ふっかけやがった」という情意に重きがおかれているのではないか。それならば第1名詞句に *him* を登場させる情意表現としての二重目的語構文が適している。一方、(28b)では(27b)よりも容認度が上がっている。*the flu* になればインフルエンザは同定可能なもの(今年の型とか)として表現されているので(28b)の与格構文に情動的価値も高い目的語としてあらわれうるのだろう。すると(28a)は「あのインフルエンザ」という「情報」も「うつしやがった」という「情意」も同時に表現していることになる。

最後にもっぱら音声にたよる「情意表現」と思われる例をあげる。

(29) a. Give **me it**.

b. Give me that bottle. Give **it me**, I say.

『英語基本動詞辞典』(1980:645-6)

(29)文中の *it* は、人称代名詞の *it* でしかも1人称(話者)でも2人称(聞き手)でもなくまさに3人称の人称代名詞と考えられる。発話状況の要素という点からすると、話者でもなく聞き手でもない。残るのは発話状況そのものしかない。まったく「場に依存」している。ともあれ、*it* は動詞で示される内容を「とにかくやる」という動作主の「意」をもっとも強く表現する効果を持つといわれる。*Drive it.* や *Fight it out.* の *it* については景山(1999b)で考察した。この種の文も「情意」が色濃い表現と考えられる。一方、話者である〈人〉目的語

me の言語化は「情」に訴えかけてくる。Jacobson (1960) での言語の機能からすると話者である 1 人称要素を言語化すると「情的」(emotive) になるからである。Dear me. のような文が情意表現であることは間違いないであろう。「情意」がよほど強くなれば it と me の両者が共に言語化される場合もありうるのでであろう。(29b) の文は全体として「くれたらくれて (いってるでしょ)」という強い気持ちが読み取れる。give me は文法化して gimme ともなるし命令法で Give me basketball は I prefer basketball と意味変化をおこしている。また give it の it は接辞 (clitic) になっている可能性も報告されている<sup>9)</sup>。つまり本来の「与える」という意味が漂白化していることを示している。

(29) のような例を二重目的語構文とし、it と me あるいは me と it のメトニミー関係をみてもあまり意味はないであろう。それよりは発話状況 (話者の me、状況そのものの it) に完全に依存し、「自己中心的に」迂言 (語を重ね) して叫ぶ「情意」を感じればいいのでであろう。

\* 本稿は日本英文学会北海道支部第46回大会 (北海学園大学、2001年10月7日) での口頭発表 (タイトル「二重目的語とメトニミー」) に大幅に手を加えたものである。また本研究は平成14年度札幌大学研究助成 (海外出張、研究課題「英語の情意表現の研究」) の成果の一部である。

## 注釈

- 1) メトニミーに関して「所有関係」と「因果関係」が解釈の難易度について差があることは瀬戸 (1995) でも指摘されている。「所有者」で「所有物」を表すメトニミーは「空間的隣接」という隣接関係のいわば基本形である。それが「時間的隣接」に横滑りする場合があります、さらに「私たちは、しばしば因果関係を読み込む (ibid.:206)」。つまり「因果関係」の解釈は難度が高く言語主体の解釈に強く依存している。
- 2) 所有構造における「所有者」と「所有物」あるいは「主体」と「属性」両方の言語化の事例はしばしば二重直接目的語構文と呼ばれる次のような文に見られる。
  - i. I envy you your dress/beauty.
  - ii. Forgive me my sin.

- 3) Thanks. や Congratulations. における複数語尾も同様に、「情報量を増す」というよりは「情意の程度」を高めているといえる。
- 4) (14) のような表面上、二重目的語構文になっている文について Langacker (1991) の主体化・文法化でとられた認知構造は中村 (2001) で述べられている。
- 5) 心性与格は基本的には「話し手または聞き手」である。心性与格は古い時代の英語だけでなく現代英語にも見られる。聞き手 you の心性与格と見られる例もある。

I couldn't forgive you him. BNC

「あいつのこと絶対許せない、もう」ほどの意味であろうか。

- 6) Cry me a river. の cry の用法は「擬似他動詞 (pseudo-transitive)」用法とされる。動詞 cry が義務的に間接目的語 me と直接目的語 a river を補部 (complement) としてとるいわれはない。
- 7) 「反復」については牧野 (1980) の『くりかえしの文法』が参考になる。牧野は日本語と英語を「反復」という観点から比較し、日本語の方が反復を好む言語であるとしている。そして最終章で次のように述べている。

以上様々な反復行為の例を非言語の文化現象を中心に、多少文化批判を加えながら、観察してきた。やはり、言語的・非言語的反復の間には平行関係があると結論してよさそうである。反復は言語の反復であれ、非言語の反復であれ、四季の反復であれ、人間の生活の緊張感をとき、生活にゆとりとリズム感を与える。反復のない人生は、われわれの人生そのものはくりかえしのきかないものだけに、全くやりきれないものであろう。生きている根底には心臓の鼓動の反復のリズムがある。反復は生そのものだと言ったらおおげさであろうか。 牧野 (1980:243)

sing a song や dance a dance は、「生命感あふれる生き生きとした反復表現」とみるのがその本質をとらえることに最も近いのかもしれない。

- 8) 不定冠詞つき名詞と無冠詞つまり裸名詞に関して、葛西 (1999) は裸名詞がタイプ、不定冠詞つき名詞がトークンとしているが、本稿の議論と矛盾するものではない。つまり問題なのはタイプ性あるいはトークン性という程度の問題であり、swim (泳ぎそのもの) と a swim (ひと泳ぎ) は二者比較においては前者 swim のほうがタイプ性が高いということであり、a swim と the swimming (その泳ぎ) との比較では a swim のほうがタイプ性が高いということであろう。
- 9) 時崎 (2001:95) 参照。

## 参考文献

- British National Corpus. (BNC)
- Collins COBUILD on CD-ROM*. (COBUILD) 1995. Harper Collins.
- 『英語基本動詞辞典』1980. 研究社。
- 『現代英文法辞典』1992. 三省堂。
- 『ジーニアス英和辞典』改訂版 (GENIUS) 1994. 大修館書店。
- Longman Dictionary of Contemporary English 3 訂新版*. (LDCE) 1995. Longman.
- Oxford Advanced Learner's Dictionary*. (OALD) 1995. Oxford University Press.
- 『ランダムハウス英和大辞典』第2版. (RH) 小学館。
- Dixon, R.M.W. 1991. *A New Approach to English Grammar on Semantic Principles*. Clarendon press. Oxford.
- Givón, Talmy. 1990. *Syntax: A functional-typological introduction*, vol. 2. John Benjamins.
- Green, G. 1974. *Semantics and Syntactic Regularity*. Indiana University Press.
- 池上嘉彦. 1981. 『「する」と「なる」の言語学』大修館書店。
- 池上嘉彦. 2000. 『「日本語論」への招待』講談社。
- 池上嘉彦. 2001. 「カオスの縁の認知言語学、あるいは、認知言語学というカオスの縁」『日本認知言語学会論文集』第1巻。
- Jacobson, R. 1960. 'Closing Statement: Linguistics and Poetics' in T.A. Sebeok ed., *Style in Language*. Wiley.
- Jespersen, O. 1974 reprinted. *Modern English Grammar on Historical Principles*, Part VI.
- 景山弘幸. 1999a. 「話者と二重目的語構文」葛西清蔵編『英語学と現代の言語理論』北海道大学図書刊行会。
- 景山弘幸. 1999b. 「Don't just book it, Thomas Cook it. についての覚え書き」『札幌大学女子短期大学部紀要』第34号。
- 景山弘幸. 2001. 「他動性と二重目的語の解釈」『札幌大学女子短期大学部紀要』第37号。
- 葛西清蔵. 1998. 『心的態度の英語学』リーベル出版。
- 葛西清蔵. 1999. 「無冠詞考」『札幌大学外国語学部紀要「言語と文化」』第50号。
- Kitamura, Hisashi. 1999. 'On To-Dative Constructions' 『北海道英語英米文学』



第44号。

Langacker, R.W. 1990. *Concept, Image, and Symbol*. Mouton de Gruyter.

Levin, B. 1993. *English verb classes and alternations: a preliminary investigation*. The University of Chicago Press.

牧野成一. 1980. 『くりかえしの文法』大修館書店。

メイナード, 泉子 K. 2000. 『情意の言語学』くろしお出版。

中村芳久. 2001. 「二重目的語構文の認知構造」『認知言語学論考』No.1 ひつじ書房。

Newman, J. ed. 1997. *The linguistics of giving*. John Benjamins.

Rice, S. 1988. 'Unlikely Lexical Entries' *BLS* 14.

瀬戸賢一. 1995. 『メタファー思考』講談社現代新書。

高橋英光. 2001. 「英語の間接照応」『認知言語学論考』No.1 ひつじ書房。

Taylor, J.R. 1997. 'Double object constructions in Zulu' in John Newman ed. *The linguistics of giving*.

時崎久夫. 2001. 「なぜ英語は文末重心か」『北海道英語英米文学』第46号。

Tuggy, D. 1997. 'Giving in Nawatl' in John Newman ed. *The linguistics of giving*.

Wierzbicka, A. 1988. *The Semantics of Grammar*. John Benjamins.

山梨正明. 1986. 『発話行為』大修館書店。

山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』くろしお出版。